

風 狂

第 5, 3 号

風 狂 の 会

詩

イチョウ並木

高 裕香

賽銭箱

出雲 筑三

バスと電車が

なべくらますみ

死せる母

長尾 雅樹

ブーツ

原 詩夏至

創造者の風

高村 昌憲

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十七）

三浦 逸雄

エッセイ

老人の冷水

北岡 善寿

金に対する嗅覚

神宮 清志

チェルノブイリ そして福島（一）

高島 りみこ

覚書

風狂川柳忘年会報告

高村 昌憲

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十九）

高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール

ぬぐい切れない悲しみを

誰が救い出してくれたのだろうか？

何が救い出してくれたのだろうか？

秋深まるイチヨウ並木を歩いていると

今までの人生を祝福しているかのように

前も後ろも 全てが黄金に輝いている。

ぬぐい切れない悲しみを

誰が救い出してくれたのか？

自分が変わらねば、何も変わらない！

今から八百三十年前の鎌倉時代
同じ宗派でありながら
骨肉の争いを止めないお坊さん

劣勢が明らかになった福の寺
守護大名に援軍を乞うと
優勢な徳の寺は滅びてしもうた

守護の家来は山城を築く
大きさに脅威を感じた福の寺
疑心がわき城を急襲したお坊さん

助けてやったのに
お前らはそれでも佛門の徒か
今度は福の寺も滅びてしもうた

それから城は何代も続いたが
大きな時の渦があり
力をつけた家来は主家を裏切った

引き立ててやったのに恩知らず
家来は主家の猛攻を受けて
滅びてしもうた

山は戦のたびに堅固に成長したが
またまた大きな渦があり
今度は主家が嫌疑を浴び滅びた

天守跡には片足折られた怨念の巢がある
角穴あいたままの柱や刀傷ある御堂
ひび割れ石から嫌われる大きな賽銭箱

始まりの時間は午前一〇時
いつも三〇分前に着き机を並べてくれる彼
今日の私は机が並び終わった頃到着した
わざと ではなくバス、電車の都合で

いつも三十人分の席を一人で整えてくれるから
たまには私も手伝おうと二十分早く家を出たのに
駅では電車遅延の放送
何処かの駅で人身事故があったらしい
かなり遠そうな駅なのにここまで影響するなんて

次々とホームに立ち
自分の時計と時刻表とを見比べる人たち
舌打ちしたり
あわててスマホに口を寄せたり
たまには困った顔をしてホームを出て行く人も

一際大きな声で聞こえてきたアナウンス
電車が次の駅まで来ている と
ほっとする人
また急ぎ連絡をする人もいて

また今日も彼は一人で教室を整えてくれた
何時も準備をありがとう という私に彼は答える
この次のバスに乗ると三十分遅刻するから仕方ないのさ
笑って答えた

いつもより早く家を出た私は
いつもより遅く到着した

渦巻く黒い闇

黒い波は空間を分割して

母は黒い布で包んだ

赤ん坊を抱いている凶柄だ

母の手は硬直して布を押え

死相を現わして息絶えた女の顔の無情

遥かな時間を遡る思い出の輪廻を追う

記憶は薄れて絵図は幻覚に迷っている

懐かしい母の胸は暗い揺り籠の気配

死の事実は二度と存在することのない

空白の魂を何処までも飛翔させる

何があったのかではない

何を掴み取るかなのだと

死の形相を瞼の裏に縫合された

幼児の脳裡は心くよかに安住を尋ねる

思慕の情は悲しみに狂燥される

母の死は氷室に埋めてしまおうと

欠落の血脈を辿って追懐の扉を押すが

感性の断片は甘え心を静かに突き離す

決して忘れてはならないと思い返して

母の面影をひたすら滑空しては綻びを解く

生涯唯一の肉親の欠損をこそ

絵心のままに苦痛の深度を計りながら

描きつくした板絵の中に記念の墓はある

生きていることがあんなにも当然の日々が

瓦解した後の苦悶の閲歴は

血路を凍らせて偶像を捨てさせる

情念を込めて描く一枚一枚の涙の陰画

割れんばかりの感情の襞を押し殺して

悪食人は死せる母に抱かれて眠る幼児なのだ

妻が白髪染めを止めてしまった
妻の頭はたちまちぱさぱさの
灰色に変色してしまった
俺の頭はもともと灰色だ
妻と俺とはその灰色の
ぱさぱさ頭を二つ並べて
神社まで散歩と参拝に出かけた
だだっ広い何もない坂道を
転がるように冬がやって来た
根無し蓬という蓬があることを
昔授業で習ったのを思い出した
ぱさぱさ頭を突風に靡かせ
妻は却ってさばさばしていた
笑っているような龍の口から
水が流れる小さな手水舎で
両手を洗って
口を漱いで
俺たちは昔話に出て来る
老夫婦のように拝殿に額づいた
賽銭はいつでも一人二十円
二人合わせて四十円
硬貨が木箱にばらばら音を立てた
境内の公孫樹は概ね散り尽くした
やがて後ろからクリスマスが来るだろう
駆け足で
それから正月も
クリスマスと正月はまるで二人の
元気な子供のように
孫のように
俺たちに追いつき
一瞬微笑み
それから再び歓声を上げながら
俺たちを追い越し
もう振り返らず
一心に駆け去っていくのだろう
この薄ら寒い初冬の下り坂を

その先の遥か彼方に
未来に
春が待つのか
そこまで俺たちが
この足取りで辿り着けるのか
それは知らない
柏手を打ち
厳粛に御辞儀をして
俺たちはまた家へと引き返した
きっぱり白髪染めをやめた妻の頭を
俺はたいへん好きだ
これぞ冬だ
帰りはいつものスーパーに立ち寄った
この前は柿が全盛だったが
今はもう銀色の紙ブーツが
ずらりと並んでいた
一列に

夢を持ちなさいと教育者のように言う人は
スポーツの勝利者や所謂有名人が多いです
競争に勝利して名を上げた成功者の言葉は
後出しジャンケンの翻弄した風が吹きます

成功の結果は何も証明していないのですが
自らの動機も過程も正しいものになります
結果から真実を見ようとする軽薄者たちが
真の成長を見落としている言葉は滑稽です

創造者たちが賞や地位の虚飾が気になると
虚偽の脇道ばかりに陥り易いのは本当です
真の創造者は功名心が邪魔になって来ると
虚勢や高慢な動作も言葉も消えて行きます

功名心に溺れると他人の思想が理解出来ず
自己肯定を勝手に映した大声で圧倒します
向上心に目覚めると他人と諍うこともせず
真の創造者の声は静謐に自らに向かいます

創造者のあなたがやりたいことは何ですか？
真実の美しい生命を映す湖を表して下さい
創造者のあなたがなりたいものは何ですか？
心から楽しめる嘘の無い風になって下さい



三浦 逸雄 「ピクニック」 6号（油彩・麻布）

爆発するだけのエネルギーがないと暴動は起こらない。フランスには革命の経験がある。ルイ十六世とマリア・アントワネットは革命によって断頭台の露と消えた。あの革命という暴動は、ビクトル・ユゴーのジャンバルジャン物語にも描かれている。最近進行中の暴動は、燃料税の引き揚げが切っ掛けで、やはり民衆は税金の値上げは喜ばない。民衆と言っても、富裕層もあり貧乏人もある。が、実際に税金が上がって苦しむのは貧乏人の側だから、暴動によって反対の意志を示すのである。最初はデモで意思表示をしていたが、政権側がこれはという反応を示さないで、時の経過とともにデモは暴動に形を変えて行くのである。フランスはこれを切っ掛けに政権を倒そうとしているかに見える。日本なら国会議事堂の前に行って、シュプレヒコールを叫んで終りになるがそこがフランス人は違うのである。国民のためにならぬ皇帝も大統領も、苦しみももたらすだけで幸せも平和ももたらさない。大統領マクロンは富裕層を優遇して貧しい者を顧みない、と民衆は見ているのである。燃料税を富裕層からだけ取るとしたら、貧しい者は文句を言うまいが、金持も貧乏人も同率の税金を払わされたら、身に応えるのは貧乏人の方である。国民全体が富裕層にならない限り、増税の問題は簡単に片づくまい。第一みんなが富裕層になるなんて夢のような話である。マクロンがどんな舵取りをするか、極東の島國で消費税十パーセントで騒いでいる我々から見ると、そこに歴史観の違いがあると言ってよい。凱旋門がテレビに映し出される。あれは誰の凱旋門か。日本では天下国家を論ずる所として、永田町の国会議事堂が映し出される。もう一つは皇居である。現在の天皇は象徴であって、政治には関与しないけれども、皇居天皇崇拜のメッカの観があり、保守派の拠所である。狙うところはかつての天皇制に回帰して、憲法改正することが念願に見える。現在の憲法は自主憲法ではなく、アメリカの押し付けであると保守派は言う。それは事実として新聞が伝えるところだ。この問題は昭和天皇の戦争責任と退位の議論に関係がある。私は二〇〇六年（平成十八年）七月十三日の朝日新聞の切抜きを持っているのだが、上段に「「退位」揺れた天皇」という大見出しがあり、その下の段に、「統治優先、GHQ新憲法急ぐ」という一回り小さい見出しがある。これを事実として保守党は自主憲法の制定を急ぐのである。天皇の退位と戦争責任の問題は平成十八年ではまだ燻っていたのである。敗戦直後の天皇は側近の木戸幸一を前に「退位を口にした。それに対して木戸は、共和制論（天皇制廃止論）を呼び起こす恐れがあると反対したが、元首相の近衛文麿などは国体護持のためには退位が必要だとの考えだった。

ところが、戦勝国の司令官マッカーサーは、天皇を占領統治に利用する考えだった。米国内や連合国には、天皇制廃止論や天皇訴追論が根強かったが、マッカーサーと日本政府はそれぞれに、天皇制存続を模索した」

この次の記述は、天皇制と民衆の情緒的關係をよく現わしていると言ってよい。四十六年二月四日付毎日新聞からの引用である。

「存続のためには、天皇制を民主化する必要があった。人々もまた同様に考えていた。そのころの世論調査では、天皇制支持が九十一%を占めたが、「現状のままを支持」は十六%にとどまり、「政治の圏外に去り民族の総家長、道義的中心として支持」が四五%だった」。天皇制支持が九十一%とは驚きである。忠君愛国の精神は死んではいなかったと言うべきか。

それはともかく、新憲法制定の経過である。「四十六年一月一日、「天皇の人間宣言」が発せられた。マッカーサーは二十五日、陸軍参謀総長アイゼンハワーに、天皇免責が得策との機密電を送った。

二月一日毎日新聞が幣原喜重郎内閣のもとに設置された憲法問題調査委員会の憲法改正案の一つをスクープした。天皇は統治権を持つ君主とされ、マッカーサーには受け入れられないものだった。

東京裁判（極東国際軍事裁判）の被告選定より先に「民主化された「天皇制」」を示したい、しかし、これでは間に合わない。連合軍総司令部（GHQ）はその後、わずか一週間で自ら新憲法を作り、日本政府に手渡した。天皇制存続と戦争放棄がセットで盛り込まれた

マッカーサーはこれで一段落したと思ったのかもしれない。しかし、何せ戦後の混乱期である。ドラマチックな展開を我々は政治に見せつけられるのである。今度は二月二十七日付の読売報知新聞が一役買うのである。「宮内省の某高官」（実は皇族の一人、東久邇宮稔彦）の話として、天皇には退位の意味があり、皇族は挙げて賛成していると報じた」というのがそれである。

天皇を統治に利用しようと考えているマッカーサーは慌てた。

「一刻も早く新憲法を、と日本政府に迫った。三月二日、東京裁判の国際検事局で被告の選定作業が始まった。四日から五日にかけて、新憲法をめぐって、GHQと日本政府の代表は三十時間、一睡もせずに議論した。

六日、日本政府は象徴天皇制を規定した憲法草案要綱を閣議決定し、公表した

占領国統治のために利用されている天皇は、逃げてゆく所がなかった。アメリカのシンプソン夫人と恋をして王位を捨てたイギリスの王様とは、立場と環境が全く違うのである。昭和天皇は戦争に敗北した国家の元首として強く責任を感じていたのである。当時の侍従次長木下道雄が、天皇の語った言葉を書きとめた日誌を、同じ新聞が公開する。「退位した方が自分は楽になるであろう。今日の様な苦境を味わぬですむであろうが、（弟の）秩父宮は病気で、高松宮は開戦論者でかつ当時軍の中枢部に居た関係上摂政には不向き、三笠宮は若くて経験に乏しい」

天皇、時に四十四歳、苦衷の中にいた。（続く）

「金儲けが趣味だというひとと時々出会う。可哀想なひとだなあ、と思うのだが皆様はどう思われるかお聞きしたい」

あるエッセーにこんな一文を見つけた。これを読んだとき、背筋にある種の寒いものが走るのを感じた。そしていろいろ考えさせられた。二〇〇二年に最初の能面の個展を開いたとき、自分の作品に値をつけて、売る姿勢を見せた。するとこうした個展で値をつけることに、不潔感を覚えるひとが居ることを知った。電話で次のようになじられたのである。「お前のオオオモテだかコオモテだか知らないが、あんなもの売れるわけがない。あんなもの買う奴は一億も二億も持っている変わり者だけだ」...これは公立中学校の校長先生のお言葉で「この不潔な奴め！」と叱りつけてきたわけだ。こういう偉い方にあっては、能面も値段を付けた途端「あんなもの」になってしまう。

初頭のエッセーを書いたA氏は医学会の重鎮ともいべきひとの御曹司として生まれ、東京雪谷の広大な屋敷の中で育ち、慶應義塾の幼稚舎から大学まで進み、その慶應で事務職として定年まで勤めたというひとだ。いわば金の苦労はしたことがないといえる。それだけに温厚で真面目な人柄は大いに多としたい存在。ピアノとヨーデルを趣味として、ピアノは美智子皇后と一緒に習っていたという。わたしにとってはこれまで付き合ったことのない上流のひとであり、貴重な友である。

それが何気なく出たと思われる発言に超えがたい距離を覚えたのである。このわたしは人一倍金に対する嗅覚は鋭いと思う。極貧の中に育ち金に関する苦労はいろいろしてきた。とにかく金に関して、恬淡としてはいられない。儲けることに人一倍感心があり、それを趣味とするというようなひとに憧れさえもつ。

「わたしは投資が趣味」と堂々と言って笑ったのは、古い友人のS女史だ。このひとの壮絶な人生に乾杯したいと思いきすすれ、可哀想なひとだななどと上から見下ろすようなことはとても言えない。いわば心底から尊敬の念をもった数少ないひとだ。S女史は貧困に育ち、結婚して三人の子供を設け、まだその子供たちが幼いときに夫を失った。勤めに出てまもなく、パーキンソン病という難病にかかり、絶望の底に落とされた。そこから這い上がったのは、まさにこのひとの金に対する鋭い嗅覚以外のなにものでもない。投資に命を懸け、不動産の運用に成功して、三人の子供たちを一人前に育てた。各々医学部に進学させ、二人の男性は医師になり、女性は医師に嫁がせた。

金に対する鋭い嗅覚を嗤うことが出来るか。金に苦労したことの無いひとには分からない、貧というものがいかに苦しいものかを。金に苦勞しないひとはじきに「清貧」などと言い出すのだ。しかし世の中に清らかな貧などありえない。貧乏はみな汚いものだ。貧からなんとしても逃げ出したい、金が欲しい、それしかない。

貧という苦しさを経験した者は、貧に陥ることの恐ろしさから防衛したいと願う。そこで金の運用を考える。貧から這い上がる方法は、投資しかないかもしれない。働いただけでは限度がある。大いに働き稼いだ金を、もっとも効果的に運用しようとする。「預金」などというのんきなことはしてはいられない。このとき「おれは金儲けが趣味だよ」とやや自嘲的ということもある

。貧の中で育った者は、拗ね者でもある。

普通に稼いで預金しているだけでは、A氏のように自分の持ち家など持てないのだ。A氏はお坊ちゃまのときから住んでいる広大な敷地の一角に自邸を建て、それを定年後に建て替えた。とても普通のサラリーマンに出来る芸当ではない。

彼が生涯勤めた慶應の事務職員は、世間の冷たい風の当たらない世界だ。学校の教職員とか、公務員、お役人という特権階級に、一般のサラリーマンの苦しさが分かるだろうか。つまり会社、特に中小の会社というところがどんなところか想像したことがあるだろうか。中小企業の会社員が、利益を追求するために働いているということの厳しさ、その並々ならぬ苦勞が想像できるものではない。とにかく利潤を追求するということのたいへんさは、筆舌に尽くしがたいものなのだ。学校というところは、その最も苦しい利潤追求から解放されている。これを特権階級と言わずして何と言おうか。

金儲けに汲々としているサラリーマン諸氏を、あまりあっさりとは軽蔑してもらっては困る。わたしは小企業の会社から慶應に就職したとき、その職場は慶應の中でもハードな職場と見られていた。残業三〇時間から五〇時間に及び、「たいへんだ」「たいへんだ」と言い合っていた。しかしわたしにとって、それは天国に近いように思え、どう考えてもそれまでの会社員のときの三分の一くらいしか働いていないという実感をもった。

体の弱いわたしには有難い職場だった。四畳半のアパート暮らしに十分満足していた。それまでの悲惨極まりない暮らしに比べたら、それはまさに天国に近いものだったのだ。結婚して六畳のアパートを借りた。二万円の月給で八千円のアパートに住んだ。そこで考えた、借金してでも先ず土地を購入して、家を建てよう。このままアパート代を払い続けても柱一本自分のものになるわけでもない。それなら先に買ってしまえ、そのためには借金だ。

そこから先は定年まで、多額の借金を持ち続けるというマイナス人生を歩んだ。それでも家は三回建て替えたし、土地を相模原から新横浜に買い換えた。それは資金運用と借金の積み重ねによった。定年を迎える日に、借金を全額返済するように計画して、だいたいその通りになった。二〇〇〇年にほぼ借金がゼロに近付き、退職金としてまとまった金を手にした。ここから初めてプラスの人生になったのである。その退職金を三等分して、三分の一を郵便貯金にして、何かのときのための用意とした。そして三分の一を妻が、三分の一をわたしが持って、それぞれが勝手に使い、お互い干渉しないことにした。

わたしは自分の得た資金のすべてを株につぎ込んだ。かねてから少しずつ相場に参入して、研究を積み重ねていた。その成果があって、この年に六五〇万円の儲けにつながった。その年（二〇〇〇年）に金がグラムあたり一千円を割り込んだので、それを買い進んだ。その後為替相場にも参入した。その結果についてかなりシビアに計算する機会があった。二〇〇六年に村上ファンドが話題に上り、日銀総裁の福井氏が一九九九年に一千万円を村上ファンドに預け、それが二〇〇六年に二千五百万円になっていると伝えられた。そこで自分はいったいどのくらいになっているのか、厳密に計算してみた。すると最初の資金が三千三百万円を超えていた。プロ中のプロと自称した村上世障より、成績がよかったことに少し胸を張りたい気持ちだった。しかもその間海外旅行に数回行っているし、美術品も買い進んでいるので、実質的にはもっと稼いでいたことになる。

そのときのわたしは強気になり、一億円に達するのは時間の問題だと思った。ところがそこ

にリーマンショックに始まる経済的異変が相次いで発生した。チャーリー・チャップリンとかチャールズ・メリルのような天才なら、こうした事態をあっさり切り抜けたであろうが、凡才の悲しさ、防戦にも限度があった。しかしそれほどに傷付いたわけでもなかった。それに勇を得て、そこそこの勝負になっていた為替相場に深入りしていった。これは前例もなければ研究書もなく、ただ為替の動きを見て、それに付いてゆくしかない。ドル・ユーロなどはまずまずの成績を挙げられたと思う。しかしより動きの激しいポンドで大失敗を仕出かした。そこでの損失は一千万円を超えた。その後もやや控えめになったものの、相場参入はやめてはいない。銀行の利息があまりに微々たるときに、配当では5%くらいになる銘柄がいくらかも転がっている。配当金は少なくとも年間十万円は得てきたし、株主優待とか、株主総会に行くと、あれこれ土産物など貰ってけっこう楽しめる。

相場というものはすべて自分ひとりしか当てにならない。というより当てにすることはできないのだ。相場の先を見通せる人間など世界中に一人も居ない。分からないからいいともいえるし、これだけは平等だと思う。予想の神様といわれたグランビルでもカウフマンでもみな敗退して、多くの人を傷つけて去って行った。誰にも分からないのだから、自分なりの相場観に基づいて参入しなければならない。それだけに十分に考えて、決断実行するときの興奮は只ならないものがある。そして思惑通りに利を得たときの爽快感などやったひとでなければ分からない。大げさな言い方をすれば、世界を征服したような気分になれる。これほど面白いものはないと思う。相場のことを思うと、この人生を二回でも三回でもしたいとさえ思う。図書館の経済書と投資論はすべて読みつくした。相場においては誰も信用してはならないのである。自分は素人なのだから専門家の意見を聞いてから...というひとは参入してはならない。おおかた損するだけではないか。

相場参入は世界情勢に対する見方を鋭くする。政治経済の動きに触覚を働かせて、素早く判断して行動しなければならない。こんな話がある。昭和二〇年の早春、兜町では軍需株がいつせいに売られて、平和株が買われた。東京が大空襲に遭うと、この戦争は終わりだと相場が判断したのである。日本が敗戦を迎える五ヶ月も前に、兜町では平和を謳歌していたのだ。

それにしても何故ひとは「カネ」のことを避けようとするのか。カネのことを一番に考えるひとを「可哀想なひと」などと言いたがるのか。これは日本人に特に強い傾向らしい。エジソンとフォードが並んで写真に納まり「おれたちが追及しているのはカネなんだ」と書いた大きなパネルをオーストラリアで見たとき、これがアメリカ人なのだと思った。彼らはカネへの関心を隠そうとはしない。それどころかカネ次第でひとの価値を決めようとさえする。それにひきかえ日本では、それをハシタナイこととして嫌う。

わたしは人前で株のことを語ったことはない。それが軽蔑の対象になり、ろくなめに遭わないからだ。しかしどんなひとでもじつはカネに無関心で居られるひとは居ない。この人生でもっとも難しいのはカネとの付き合いである。もうひとつ性との付き合い、この二つがもっとも難問であって、これと正直に向き合わずしてほんとうの生きる意味があるか。すぐれた文学なら、この二つの難問と向き合っている。

わたしはこの人生に充実感を感じているし、充足感もある。この世界の只中に居るという実感がいい。日々生きて動いている世界の情勢を見ていると、それは何よりも凄い迫力があり、飽きることはない。

これでもあなたは、わたしを可哀想なひとだと思うか。（了）

私がこの数年で衝撃を受けた本が3冊ある。北條民雄著『いのちの初夜』、石牟礼道子著『苦海浄土 わが水俣病』、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ著『チェルノブイリの祈り 未来の物語』。3冊とも近年に出版されたわけではなく、わたしは今更ながらのかなり遅れてやってきた読者だったといえる。スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチは2015年にノーベル文学賞を受賞し、日本での報道量も格段に増えて、わたしも彼女の著書のうち前記の『チェルノブイリの祈り』のほかに、『戦争は女の顔をしていない』『ボタンの穴から見た戦争 白ロシアの子供たちの証言』を読む機会を得た。今回は『チェルノブイリの祈り』と、そこから見えてくる福島と日本の現状について考えてみたい。

『チェルノブイリの祈り』の著者スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチは1948年5月31日、ウクライナで生まれ、その後、隣国のベラルーシに移り住んだ作家だ。彼女の作品は本書に限らず、どの作品も多くの人びとにインタビューをし、それを構成していくというドキュメンタリーの形を取っている。アレクシエーヴィチはそのような方法を取っていることについて「真実をとらえること、これこそ私がやりたかったことです。（略）作家であると同時に、ジャーナリスト、社会学者、精神分析家、伝道者であらねばなりませんから」と語っている。『チェルノブイリの祈り』でも300人あまりの人びとの声を聴き取っている。

旧ソ連ウクライナ共和国（現ウクライナ）にあるチェルノブイリ原子力発電所の4号炉が爆発事故を起こしたのは、1986年4月26日未明のことだった。放出された放射性物質はヨーロッパを巡り、日本にも到達していた。『チェルノブイリの祈り』が発表されたのは事故から11年後の1997年。事故後まもなく汚染地に入って取材を開始していたアレクシエーヴィチは、実に10年以上のものを費してこの本を書き上げたのである。

冒頭に登場する消防士の妻リュドミーラ・イグナチェンコ（愛称リューシャ）の証言が凄まじい。リューシャの夫ワシーリイ・イグナチェンコ（愛称ワーシャ）は、チェルノブイリ原子力発電所から4kmほどに位置するプリピャチ市のキベノーク中尉率いる消防隊の隊員だった。ワーシャは事故当日の未明に発電所で火事（普通の火事と告げられていた）との報を受け、出動した。夜が明けてもワーシャは戻ってこない。リューシャは朝7時になってようやく、夫がプリピャチ市内の病院にいることを知る。彼女が駆けつけると、そこには全身がむくみ腫れあがったワーシャがいた。しかしワーシャは秘密裏に特別機でモスクワに移送されてしまう。同時に現場に入った4人の消防隊員と、最初に駆けつけた別部隊の消防隊長プラヴィーク中尉もモスクワに移送された。プラヴィーク中尉に関しては、宮腰由希子氏が日経ビジネスオンラインで「チェルノブイリ消防士の母は笑わない 命を落とした息子と残された家族の今」と題して、プラヴィーク中尉の母親ナターリアにインタビューした記事を掲載している。その記事によると、プラヴィーク中尉は持ち場の消火を終えた後、後発隊だったプリピャチ市の消防隊を支援している間に、致命的な量の放射線を浴びてしまったのだ。事故の2週間前にプラヴィーク中尉の家庭には娘が生まれたばかりだったが、妻と娘の3人で過ごすことができたのはほんの2、3日だけだったという。帝王切開で出産した妻は休養が必要とされ、妻も娘も事故後、中尉に再び会うことはなかった。移送された6

人のうち、ナターリアだけが「誰にも口外しないように」と言う秘密警察の要員に付き添われ、息子のもとに行くことを許された。息子が中尉であったということへの計らいだったのだろう。

ナターリアのような〈つて〉を持たないリュージャは預金をすべて下ろし、自力でモスクワへ向かう。なんとか病院を探し出し、守衛にお金を渡して特別放射線科に入り、「お子さんはいますか？」と尋ねる放射線科部長のグシコーワに、第1子を妊娠中だったリュージャは「息子と娘がいます」と嘘をつく。グシコーワは「2人いるなら、もう生まなくてもいいですね。抱擁もキスもいけません。そばに行くのもだめ」と言って、リュージャは病室に入ることができた。他の患者たちとトランプをしていた夫のワーシャが振り返ると、プリピャチの病院ではふくれていた顔の腫れはひいていた。しかし彼らの病室は線量計が振り切れるほど放射能で汚染されていて、ふたりの再会の喜びも長くは続かなかった。ワーシャの様態は急速に悪化していった。（つづく）

参考文献

- ・『チェルノブイリの祈り 未来の物語』スヴェトラナ・アルクシエーヴィチ著・松本妙子訳（岩波書店）
- ・ <https://business.nikkeibp.co.jp/article/report/20131213/257032/?P=1> 「チェルノブイリ消防士の母は笑わない 命を落とした息子と残された家族の今」宮腰由希子（日経ビジネスオンライン）
- ・ <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/Chernobyl/GN/GN9205.html> 「チェルノブイリ原発事故による放射能汚染と被災者たち（1）」今中哲二
- ・ <https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/chernobyl/> 「悲劇から30年、チェルノブイリの実相」（日経電子版）

<二〇一八年十二月二日（日） 吉祥寺永谷スペース41にて>

主に現代詩人たちの集まりである「風狂の会」の忘年会において、詩人自らが川柳を捻って発表することになったのは一九九四年（平成六年）十二月十一日に開催された会が最初である。数えてみると今回が二十五回目（うち一回は川柳花見会）になる。この間に、多くの詩人たちが川柳を「楽しい一行詩」（齋藤志氏）として親しんで来た。各人の応募句数は前回同様に、今回も題詠及び自由詠三句ずつ計六句までであり、題詠の題は主宰者の北岡善寿氏が毎年時宜に叶って選択されたものである。選考方法は、従前から川柳の専門家は一人もいないようであったから、句の善し悪しは参加者全員の投票によって決定されて来た。なべくらますみ氏が整理して一覧に纏めて頂いた題詠三十一句及び自由詠三十三句のうち、各三句ずつ計六句を各人が投票用紙に記入して、票が多い順に一席、二席、三席及び佳作を決定した（但し、自分の句には投票しないことが暗黙の了解事項になっている）。なお、同数の場合は参加者全員の挙手により決定したが、今回はそれでも同数の場合があったので、急遽作者同士のジャンケンで決定するという風狂の会らしく誠におおらかな決め方となった。如何なる賞にも出来の善し悪しの外に、運・不運は付き物であるから決して不公平ではないと思われる。結果は次のとおりである。

◎題詠「改竄」

| | | |
|----|------------------|----|
| 一席 | つまんでも改ざんできぬメタボ腹 | 裕香 |
| 二席 | 人生を改竄したい年金者 | 昌憲 |
| 三席 | 憲法を改ざんする気かシンゾウさん | 善寿 |
| 佳作 | 忬度が改ざんを呼ぶ公文書 | 清志 |

（一席）この改ざんなら一生懸命やるべし。目的を間違えると努力が徒になる。泥棒もスリも不正も一生懸命やるのである。目的を見失わないことが肝要である。

（二席）年金額の改竄は不正であるから出来ないが、大丈夫、何とか生活できる。収入が減れば支出も不思議に減って来るようだ、本当に。

（三席）憲法とは、国会議員の皆さんが遵守すべきものではないのだろうか。法律とは、お役人も遵守すべきものではないのだろうか。どちらも自分で作って自分で守るんだ。

（佳作）忬度は相手の気持ちを思いやることなのに、何時の間にか自分たちに都合の良い公文書にするから可笑しくなって来るのである。歴史は夜創られる。

入選しなかった句にもなかなか優れたものがあったので、次に筆者の独断と偏見でご紹介することにしたい。

| | |
|------------------|-----|
| ・「改竄」をまず「改正」と改竄し | 詩夏至 |
| ・エーアイに勝ってみせるぞ改竄で | 筑三 |
| ・改竄動いてネズミー匹出ず | のりお |
| ・改ざんは 針千本を飲んでやれ | 武彦 |
| ・改竄の文字に隠れたねずみ算 | ますみ |

- ・改ざんも地震がくれば忘られる 善寿
- ・外（そと）のこと互いに改ざん家族愛 裕香
- ・教科書に墨改竄は以後ずっと 詩夏至
- ・夜長きや右脳と左脳後ろ前 たか子
- ・改竄の責任誰も知らぬ振り 雅樹

◎自由詠

- 一席 ヘそくりの在り処忘れて妻に訊き 清志
- 二席 若者よ大志をいだくな寿命は長い 武彦
- 三席 ランドセル肩の重荷はまだ続く ますみ
- 佳作 大臣の学力テストを試してみたい 武彦

（一席）夫がヘそくりをする処が現代的であるが、考えてみれば冬眠をしない生き物はヘそくりをして生き延びて来たとも言える。妻もヘそくりをしているに違いない。

（二席）クラーク先生の言葉のパロディが生きており、人生百年の時代の川柳として新鮮で説得力がある。歳を取ると大志よりも今日の予定、夢よりも現実であろうか。

（三席）受験の重荷は、現代では小学生の肩にもかかって来た。将来は英語の本も増えるらしい。NYでは乞食も英語を話すから、大切なのは考える力に違いない。

（佳作）「末は博士か大臣か」と言われる程大臣はエライ人だったのに、間違っただけかいると「大臣みたいになるよ」と言われるようになるのかな。

自由詠にもこの外に優れた句が色々とあったので、同様に筆者の独断と偏見で次にご紹介することとする。

- ・トランプをさばいて凌ぐ支那の夜 筑三
- ・甘い祖父（じじ）だ泣く前に負けてやり 詩夏至
- ・泣き止んだ俺を誰かがさげすんで 詠み人知らず
- ・責任を取るの地位が低いから 昌憲
- ・降りる人席譲りかと止めて恥じる 雅樹
- ・治せない予防できない認知症 清志
- ・鬼ごっこ昨日の敵は今日の友 たか子
- ・きれいだね妻の顔見ず夜景見て 裕香
- ・コメントは控えるだけのアホ官房 のりお
- ・じゃまなのに長生きせよとおだてられ 善寿

◎講演「特攻隊員が遺した川柳」神宮清志氏

当日は前半を川柳の選考に充て、後半は神宮清志氏によってインターネット等から収集された特攻隊員たちの川柳について講演が行われた。全三十五句が紹介されたが、いずれの句も身近に迫った死と対峙する若者たちの悲痛と諦念を通底としており、読む者の胸を締めつけるものがあった。辞世の句としての川柳の趣もあるが、虚飾を放擲した人間の本性も垣間見ることが出来るので、特段に印象深かった句を次にご紹介する。因みに、特攻の出撃命令は三日前に本人に

知らされたとのことである。

- ・ 生きるのは良いものと気付く三日前
- ・ あと三日酔うて泣くもの笑うもの
- ・ 明日死ぬと分かっているながら飯を食う
- ・ 特攻隊神よ神よとおだてられ
- ・ 特攻へ新聞記者の美辞麗句
- ・ 必勝論必敗論と手を握り
- ・ 勝敗はわれらの知ったことでなし
- ・ 殺生は嫌ぢゃとしらみ助けやり
- ・ 犬に芸教えおほせて友は行き
- ・ いざさらば小さな借りを思い出し

(以上)

第十五章 (二)

「お前の未来を知ろうとするな。それは禁止されているのだ」。しかし、私は易者の声を聞きました。重大で正確で節度のあるその言葉に私は驚嘆しました。時々彼は言いました、「この戦争で殺されないだろう」。他の人に対しては、「近いうちに重大な事件があるが、死ぬことはない」と言いました。そして、「判断力に関しては少しも持たないし、決して持ったことがなかった」と言いながら、下士官の手をぞんざいに拒絶している彼を私は見ます。真実はそれだけです。他の者の予言に関して、その手は自分で確かめていました。その手が関係した者は、胸を馬の後脚で受けてもやっとの思いで治しましたが、その様にして戦争が終わります。私はその点に関して少しも決められません。言うべきことは沢山あります。私は、私たちの領域の生活と、野生の背景と、これらの予言の間での調和に気付くために自分を抑制します。ミサは私に不快感を与えました。従って調和の感情が、信仰と呼ばれているものの全てであると私は思いますし、信仰を禁止することは重要でなく、既に他の多くの思想を持つことが重要であると思っています。それは殆どスピノザが情熱に関して言っていることです。従って両手によったこれらの未来の思想は、樵や聴衆や私自身という樵の妻その人に適していると私は考えました。

二つ目の思い出とは音楽のことです。私たちは蠟燭の明かりの輪の中に、他の砲兵中隊の二、三人の仲間が夜になって姿を現すのを見ました。一人は第十八砲兵隊で借りたヴァイオリンを持っていて、最高音のE線の弦は鋼鉄線に変えられていました。私は、パガニーニが弾いたかも知れない様にそのヴァイオリンを手に取り演奏しましたが、それは私の人生で最初で最後でした。何故なら別な言い方をすれば、私は下手にしか弾けなかったからです。覚えていた全てのロマンスがそこで弾かれました。彼らは劇場にいるかの如くに聴いていました。泥だらけの小道から、誰も知らない酔っ払いがやって来たのはその時です。服には泥が付いていて、片方の手で私たちの小屋の杭にしがみつき、そしてもう片方の手で音楽会の指揮を執っていました。幾つもの曲の題名とか曲の始めの音を言い、そして本物の愛好者として拍子をとっていました。突然に蠟燭が消えて全てが終わりました。その酔っ払いも消えました。彼が何処から来て、何処へ行ったのか誰も知りませんでした。

樵の妻の様な私の生活は、その様にして繰り広げられました。そして、私は何時もびっこをひいていました。しかし、郵便物係下士官が言った様に、「この生活には確かなものは何も無いのです」。或る日、正午丁度に私は指揮官の通知状を手に入れました。「大尉からの命令である。C上等兵は食糧を持って砲兵中隊へ参上すること」。一通の命令は数々の思考も終わりにします。夜が更けると荷造りをして私は、照準手と一緒に無蓋馬車の上に居りました。そして私たちの方へ横揺れする飲料水の小さな樽を、懸命に足で押さえていました。前方には二人の御者と四頭の馬がはっきり見えました。そして全てのものが、がたがた揺れて道を登ったり降りたりして進みました。最初は程々の揺れでしたが、間もなく殆ど進んで通れない程になりました。馬車は傾き、樽は転がりました。これらの計り知れない夜に、一度ならず砲弾の積荷が流されました。馬車を立て直して積荷を作り直さなければなりません。T大尉は良く私に言っていました、彼は補給のこの仕事を感嘆していましたし、この仕事は不可能なものと彼は判断したため監視す

ることには嘗て十分に用心していたとのことでした。その時御者たちは、手綱を緩めると馬が地面に鼻を付けて穴を探しながら巧みに引っ張って行くことを彼らは語ります。乗客にはこのことは何も見えません。しかし他の者から聞いたり見たりします。その日の夜にヴェルダンへ北上した人々が、猛火を映し出した様に見えた空を何時かは忘れて仕舞うと私は思いません。そして騒音に関して、大きな障害物が動くような想像力でも乗り越えるのです。その夜の騒音は普通でしたが、雲は火事の様に見えていました。

二つの砲兵中隊がボア＝ブリュの窪んだ道で忙しくしていましたが、まさに地名の強さからは隠れています(3)。この窪地の上方は未だ余りに高かったのです。そこに達するにはよじ登らなければなりません。この登攀には、騒音が脅迫的なものになっていました。幾つもの爆発が、私の仲間の照準手の目当てによって真ん中辺りで起こりました。しかし大きな音にも鼾をかいて寝ることが要求されました。でも、車の中では勇者になれません。もう一人の砲兵は地面を跳んで知っている道に行くのを信じて選択しました。私は決断出来ずに苦労しながらも、足で樽と戦いながら独り残りました。ついに私たちは一つのランタンの明かりを見ました。そして台所の前に到着した時に、何時もの様に正直で礼儀正しいジャンナンが現れました。彼は私に挨拶して、私の荷物を取り、彼の後を付いて行く私を迎え入れましたが、まるでホテルのドアマンの様でした。一瞬にして私も彼と同じに物静かになりました。暗いその夜には、少なくとも彼はこの小道に専念するだけでした。五分後には私たちは、すっかりきれいに片付けられていて余り飾り気がないが、十分に明るい避難所へ降りました。そこは監視者たちと一緒に私の住まいになりました。私たちがいた処は高所であり、そして我々の砲兵中隊がいた盆地の殆ど左側でした。私たちの処には、驚くことに鉄板の保護板で備えられた煙突がありました。砲弾によって正確なほど細かく木々が切られていた森からは、罅が入って良く燃える薪を私たちに提供してくれました。この場所においては、そしてこの地層は十分に厚くありませんでしたけれども、もしも外部の爆発が屢々蠟燭を消すだけであったなら、私たちは静かにしていました。ランプをしたり、食事をしたり、眠ったりして、この様にして私たちは時間を過ごしました。任務の間隔は長くなった儘でしたし、私の間隔も一段と長くなっていました。しかし私が付近を歩き回った時、不気味な印象と外にいることで自然な恐怖を私は十分に受けました。敵との距離は遠くありませんでした。私は五分間監視所にいたり、十分間大尉の避難所にいたりしていました。監視所で私は、我が軍の砲弾が落下するのを見詰めていました。ある時はセディルと命名されていた敵の塹壕の手前でしたし、ある時は向こうに落下しました。私は有名なコルボアの森を見ましたが、我々の森よりももっとばらばらに砲弾で刻まれていました。そして私が隙間から右側を見ると、ムーズ川の蛇行が見えましたし、その向こうにはブラバン村が見えました。その夜は、順番でしたので私が歩哨に立ちました。穏やかな数時間でした。僅かに監視のために敵の砲台が間隔を置いて時限弾を数発撃って来ただけでした。以前の夜の様に、一斉砲撃の音が連続して聞こえることは最早ありませんでした。轟音は雷雨によっても蘇りましたが、その時は耳を聳する程に恐ろしいものでした。

殆ど毎晩大尉は、私がブランデーを飲める様に招待してくれました。でも、それは彼の口実でした。何故なら彼は少しも飲めなかったからです。そして彼は別の方法で心意気を示さなければなりません。彼の喇叭手とコックであり私の古い友人でもあったモーパーが私に直ぐに言いましたが、大尉は以前と大変変わって優しくなり、敵の陣地に迫る対壕に殆ど降りなくなった

とのことでした。大尉は戦争を忘れる練習をしていたのであり、そこに到達したのであると私は理解することが出来ました。私たちはモンマルトルのアトリエにいるかの如くそこに居りました。従って私の美学についての考察は熟成し始めました。もしも誰かが専門の話をしたとするなら、それは私でした。私は観測した砲撃のずれも諦めませんでした。ずれは時々嵐となって吹く風に特有のものと見做しました。風が鋼鉄の小さな塊である砲弾に著しい影響を与えることを大尉は信じませんでした。彼には機械技師の精神も、幾何学者の精神もありませんでした。私は、九キロメートル先の目標を砲撃するには、砲弾をどの位の高度に上げるのかを知りたいと思いました。彼は千メートルであると言いましたし、それは多くの人々が言っているものと信じていました。私としては、この推測に従って描かれた軌道では不可能であると判断しました。私は三千メートルと推測しましたし、それでも正解よりも低いと自分では信じていました。私はその時、フォンテーヌブローにいたゴンティエに手紙を書きました。彼は慣例通りの書式を私に送りましたが、多分それは間違いであると彼は書いてありました。恐らく間違っていたのですが、少なくとも可能性はありそうなことでした。今でも私はこの問題に直面していました。三千メートルの高度の風とはどんなものでしょうか。そのことを知ることがなければ、そして私が間違っただけで探求することになるなら、戦争の終わりまで精神が休まらなくなります。パリの人々が良く知っているベルタ砲(4)に導いた大砲の問題に私は陥りました。少し前から風によって、敵の前線から既にフィリイにいる私たちの処に、子供たちが遊ぶものよりも少し大きい赤や青の風船が到来していました。これらの風船が何の役に立つのか誰にも言えませんでした。軍隊内ではもっと長い時間を掛けてそれを知ることに着手しました。セオドライト(5)の方法で風船を観察しながら、色々な高度の風向きを測ることを学びました。素早く解釈出来る表が計算されましたし、それと同時に大砲を撃つために修正された表も別に計算されました。私たちが砲兵中隊で過ごした間、これらの表は一つも使いませんでした。しかし少なくとも一ヶ月後に私は、様々な高度の風の速度と方向を天気予報と一緒に毎日受け取りました。それは多くの会話の主題になりました。私は、ついに長い糸に繋がれた風船を想像しました。糸の角度は、風の働いた力であるとの考えを与えることが出来ました。最後に私は気象予報官になりましたが、その方法と職務を学びました。

私は先程、ベルタ砲のことを話しましたが、我が軍の砲兵たちにとっては予想も出来ないものであり、まさに信じ難いものでした。私はこの非凡な発明のことは何も知りません。しかし私が推測するのは、軌道の驚くべき高度に注意が喚起され、大きな砲弾の発砲にはそれだけでも高さ六キロメートルの処へ行くことでした。稀薄な空気の高さを通過することは、それだけでも多少なりとも軌道が短縮すると推定するのは怪しまなければなりません。敵の砲兵たちは曲射か迫撃による砲撃でも、彼らの最も強力な長い砲弾を試みて驚くべき成果を得ていたと私は推測します。そこから彼らは百二十キロメートル先からパリを砲撃しに来たのです。そして、この出来事で最も驚くべきことは終戦後に、大砲を発砲した地点や大砲そのものの痕跡をどんなものでも隠すのが容易でなかったのに、発見されなかったことです。大砲の発明そのものに関しては、この種の他の機械の大成功同様に私は余りびっくりしませんでした。私は一つに纏められた複数の大砲の威力を容易に理解します。そして、力学的なこれらの全ての成果は嘗て蓄積された仕事量の問題とか、もしお望みなら金銭的な問題でしかありません。我々の砲兵たちは一生懸命に発砲しながら、そして近い処の発砲音に従って遠い処の成果を判断している時、それは最初の動き

でしたが、少しは幾何学者の様に私には見えました。

監視所にせよ避難所にせよ、私は夜になって大変遅く戻りました。その時、都合の悪い時もありました。その場所は着弾で掘られて、めちゃくちゃにされていました。鐘の様に時限弾が鳴っているのを私は屢々聞きましたし、それらの閃光は石の上に乾いた騒音を生んでいました。訓練された耳を持っていた友人のモープーはそれらの騒音を観察して、動くのに有利な瞬間を私に教えてくれました。（完）

(3) ボア=ブリュは地名であるが、直訳すると「ごわごわした粗い森」である。

(4) ベルタ砲は、ドイツ軍がパリ砲撃用に造った長距離砲である。

(5) セオドライトは、目標物の高低角と水平角を測る光学器械で測量や天体観測などに用いる。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも づくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榎』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『—ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第53号

2018年12月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/124809>

編集: 風狂の会 (担当: 高村 昌憲)

編集担当者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124809>

電子書籍プラットフォーム: パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社トゥ・ディファクト